

ST の現状

— Current Situation of Speech-Language-Hearing Therapists —

言語聴覚学専攻長 塚本 能三

言語聴覚士（以下 ST）の歴史はまだ浅い。

理学療法士（以下 PT）、作業療法士（以下 OT）が立法化されたのは 1965 年 5 月、翌年 1966 年から国家試験が始まった。一方、言語聴覚士法が制定されたのは 1997 年 12 月、1999 年 3 月に国家試験が始まった。遅れること 32 年のブランクがある。

最近の 5 年間における国家試験の 1 年あたりの ST 合格者数は $1,785 \pm 160$ 名、PT は $10,373 \pm 939$ 名、OT は $5,029 \pm 519$ 名のように ST 人口の増加は極めて少ない。国家試験の全国合格率はこの 5 年間で、ST は 65 ～ 75 %、PT は 79 ～ 89 %、OT は 81 ～ 88 % と ST の合格率は低い。養成校数では（2024 年現在：募集停止校も含め）ST は 76 校、PT は 279 校、OT は 201 校と ST の養成校も少ない状況である。これら様々な要因が影響してか、ST の認知度が上がってこない現状がある。現在の ST の周辺環境を嘆いても仕方がないことである。我々 ST 教員の使命は、いかにして ST の認知度を上げ、ST 人口を増やすかということである。大きな役割を担うのは高校ガイダンスである。こんな状況では、生徒が集まらずドタキャンもあるが、受けてくれた 1 ～ 5 名に対して与えられたわずか 30 ～ 40 分で可能な限りわかりやすく解説する。私は 1, 2 年生に対しては、まず、現段階から将来進むであろう道を探すことの意義について述べ、その道は人のために役立つ道であること、そして、医療、リハビリテーション、ST へと結びつけ解説する。3 年生については本校の魅力、ST の魅力について具体的に解説する。いずれの学年にも伝えることは、オープンキャンパスには可能な限り参加してもらうこと。それは、ST 専攻の有資格者がそれぞれ専門領域の体験授業を毎回行い、ST を知るためには全回参加が望ましいからである。また、伝えるべき必須項目は美味しい「定食」が食べられるということである。ある和歌山の高校に行ったとき、相撲部の彼の目が光ったことを印象深く今なお思い出す。学生の胃袋をつかむことも大事である。いつも美味しい「定食」を提供して下さる関係者の方々に心より感謝する。さらに、大学院の存在は学生へのアピールに拍車をかけることができる。先日のお阪での高校ガイダンスでは来日 2 年目の西アジア国籍の生徒が受けてくれた。流暢な日本語で評点も優秀であった。ST に興味を持ち、オープンキャンパス参加も約束してくれた。少子化が進む中、今後は外国籍の生徒にも視野を向けていくべきと感じた。

言語聴覚専攻では昨年より河リハ卒後研究会を立ち上げ、すでに 3 回実施している。目的とする主なところは、卒後教育の充実、神経心理学、高次脳機能障害学、失語症学、摂食嚥下障害学、音声・発声障害学・認知症学等への貢献等がある。最近、ご高名な先生が「失語症をみれる ST は絶滅危惧種である。」といわれたということを知った。このことには根拠がある。日本言語聴覚学会第 37 回では一般演題 335 題のうち失語症についての発表は 66 題。ところが 10 年後の第 47 回では一般演題が 436 題と 101 題増えているが、失語症が 65 題と増えず、一方で嚥下障害関連が 80 題から 123 題に増えている。ST の現在の職域が嚥下にシフトする傾向が分かる。日本高次脳機能障害学会の第 37 回一般演題 292 題のうち、失語症 32 題、第 47 回では一般演題 192 題と 100 題減少し、失語症は 20 題に減少している。日本神経心理学会においては第 37 回一般演題 103 題のうち失語症が 12 題、第 47 回では一般演題 72 題に減少し、失語症は 2 題となってしまう。まさに危機の状態と言える。

この状況を鑑みて、本校では失語はもちろん、高次脳機能障害をしっかりみれる学生を育て、卒業後も研究会、学会、論文作成等でのサポートを続けていきたい。